

## 現代における芸術の本質的意義

今道 友信（東京大学名誉教授・哲学国際センター所長）

ただ今、山口大学人文学部添田学部長、それから異文化交流研究施設の本田先生それぞれの方からご丁寧なご紹介をいただきました今道友信と申します。お手元に一枚の紙を配っていただきましたが、そこにございますように、そしてあらかじめ広告のチラシなどでもお知らせいたしましたように、本日私は「現代における芸術の本質的意義」という題で約1時間お話しすることになっております。今日ここに山口大学人文学部異文化交流研究施設と財団法人山口市文化振興財団のお招きによって、皆様に私の研究発表をさせていただくことを大変光栄に存じております。時が限られておりますので、色々ご挨拶を申し上げてお呼びくださった方々へのお礼を申し上げなければならないのですが、早速講演の内容の方に入ろうと存じます。お願いがございますが、紙を配りましたけれども、紙に何が書いてあるのかということ为先に読むということをしらずに、全ての注意を私のロゴスと言いますか、話す言葉に集中していただきたいと存じます。私は必ず話のときに、この紙に関わるところは、1の2行目をご覧くださいとか3の3行目をご覧くださいというように申し上げますので、それがあまるまではどうぞ私の話に注目していただきたいと存じます。

### 我々の現在の所在はどこか

最初にまず、私どもが共通に考えなければならない問題、それは何かと言うと、我々の現在の在り処はどこか、我々は現在どこに在りしているのか、ということをはっきりと意識することではないかと思えます。それはあまりにも分かりきっていることだ、我々が今山口市のこういう建物の中にいるのだと、それもある限られた部屋にいるのだと言えばそれは決して間違いではございません。しかしその我々というのはここに在りのお互いの数十人の者でございます。いやしくも現代における芸術の本質的意義ということで考えようと

すれば、我々というのは、我々を含んだ今の人類全体のことでないでしょうか。人類のどこかの人々を除外して、我々は現代における芸術の本質的意義を語ることが出来るか。それは許されないことです。勿論私どもの限られた知識で、人類全体のことをまごうことなく考えることは出来ません。しかし意識としては、私ども限られたグループの問題を考えるのではなくて、人類文化のことを考えなければなりません。ですから、我々人類は現在どこに在りのかということを考えるということが、まず我々の在りを問うということの内容であります。人は「我々」と言ってもひとりひとり己の立つ場所を知らなければなりません。その場所のことを哲学ではしばしば「トポス」という名前と呼びます。Topos、1の1行目の右の方にtopos（場）と書いてございますが、それでこういう風に私どもの立つトポスのことを探す考察を「トポロジカル（topological）——トポスを探す——」という言い方がございます。トポロジカルというのは場を探索することであります。我々の立つトポスこそが現代であります。我々はみな現代の中にあるのです。その現代をどういう風に考えるかということによってまた答えが多少変わってきます。現代というのは今日のことだと言えば今日もそうです。しかし今日だけが現代ではなくて、ある程度私どもが現在いる年のことを考えますと、紀元2007年ということですから、この紀元2007年というのは21世紀のはじめですが、21世紀が急に出来てきたわけではありませんから、一応20世紀と21世紀の7年を加えたこの107年間を、まず我々が立っている場所だということにしましょう。もう20世紀は過ぎ去ったのだから我々の場ではないということも言えますけれども、20世紀の積み重ねが21世紀に在りしているのです。そんなことを言えば19世紀の積み重ねもあるだろうと言うのですけれども、21世紀の現在が最も今日の現在とつながっていると、現在

が最も現在とつながっていると思われる時代は20世紀ですから、色々ご意見もありましょうが、20世紀とこの7年とを我々が現在いるトポスだということにいたしましょう。1に3行書きましたことはそのことですから、もうこれは済ませたことにします。

### それはいかなる時代であるか

2の1行目と2行目をご覧ください。読みます。「それはいかなる時代であるか——それというのは20世紀と21世紀のこの7年間——。時代を見るとはその文化および文明の特色を見るに如くはない。」色々な見方がございましょうけれど、ある時代を概括しようとしたらその時代の文化と文明を見るに如くはない。そして、その文化面でも色々ありますけれども、他の時代がない特色のこを見つければよろしいのです。ですから、20世紀から21世紀にかけて他の時代に十分無かった文化面の大きな功績は何かと言うと、2の3行目に書きましたが、文化面では基本的人権の確立、それに伴う多くの権利の承認、これは20世紀とそれからその続きである21世紀7年の大きな仕事だと言わなければなりません。皆様ご存知のように、19世紀にはまだ前半は奴隷や農奴がおりました。話を簡単にするだけにして、アメリカのことだけを言いますが、アメリカは19世紀の途中まで奴隷制度を持っていたのです。ですから、奴隷制度を廃止しても、それに影響されたような身分の差は色々な国にもございました。日本でも、奴隷という言葉はございませんでしたけれども、19世紀から20世紀の始めにかけての日本のそういう下層階級で富裕階級の下女とか下男を務めていた人々の人権は、今日にくらべれば殆ど認められていなかったと言ってもよろしいでしょう。ですから、20世紀は21世紀にかけて、基本的人権の確立ということに基づいて、人権が認められてきた時代だと言ってよろしいと思います。今日皆様の中に大勢女性の方がいらっしゃいますが、20世紀の中頃までは、女性はどこの国でも、殆どどこの国でも選挙権は持ってありませんでした。日本が、そういう女性の参政権を認めたのは1948年頃だと思いますが、それは日本だけではなくて、フランスもスイスも同じ年でございます。ドイツだけが少し早かったけれども、世界全体で男女平等に参政権が認められるようになってきたのは20世紀後半です。ご承知のように、アジアの南方の国々ではつい最近そういうことが認められてきました。そしてそれは単に女性の男女平等と、権利としての男女

平等ということばかりでなくて、身障者の人権も認めることです。皆様、私が大学の学生の頃大学がどういう建築構造になっていたかと言うと、エレベーターは一つもございませんでした。エレベーターというのは贅沢な施設でございましたので、当時としては、3階か4階ぐらいの建物の大学にはエレベーターはついておりませんでした。階段だけです。どうやって身障者の方が学ぶことが出来ますか。もちろん人が親切に助けてあげて抱きかかえるようにして連れて行くこともありましたけれども、その数が多ければ大変ですから、おそらく身障者の方で遠慮してしまうということになりますでしょう。ですからこれについてはもう多くを言いませんが、人種の差別も無くなってきたということが20世紀終わりから21世紀のはじめにかけての現状でございしますので、世界中の全ての人が基本的人権においては平等であるということは、これから先の人類の歴史の上においても、20世紀21世紀のこの今の我々の時代を人々が顧みたときに、文化的に大事な仕事として、「基本的人権の確立」が語られますでしょう。文明の面ではどういうことかと言うと、これは申し上げるまでも無いと思いますが、科学技術、テクノロジーの躍進による「技術連関」の成立ということがあります。「技術連関」とは、2の4行目をご覧ください。「文明面では科学技術（technology）の躍進による技術連関——これは私が作り出した言葉でございしますので、英語でもテクノロジカル・コヒージョン（technological cohesion）と時々言ったり、テクノロジカル・コンジャンクチュール（technological conjuncture）という風に言っております。外国ではテクノロジカル・コンジャンクチュールと言うのがこの頃優勢になりましたけれども、どちらでも結構ですが、技術がつながりを持っているということですから、技術がつながりを持っているということは、結局どういうことかと言うと、技術は道具であるという性格を持ちながら、相互に連関を持って環境となっていることでもあります。ですから、現代とはどういう時代かと言う時に、文明の面から言えば技術連関が成立した時代、つまり言ってみれば、技術が道具であるという性格を持ちながら環境となっているということだと言ってよろしいでしょう。よく環境倫理学とか環境を大切にしないと人々の多くが、環境という言葉で自然だけを考えているという場合がございしますが、私どもの実際の生活の環境という、これは技術連関が自然と共に環境になっているということを明らかに

意識しなければなりません。早い話が、今日皆様がここまでいらっしゃる時に何人が土を踏んでいらしたでしょうか。土は殆どアスファルトで覆われていて、あるいは石で覆われていて、それは自然ではございません。確かに風が吹き、太陽が照り、空気がございますから自然は大事なものです、しかしもうこの部屋になれば、お互いに仕事をするという時に、一切の外部の音が聞こえない施設、それなのに空気はどこかでベンチレーションがあって、息苦しくならないで済むようになっているとか、私の声が隅々まで聞こえるようにマイクロフォンの施設があるというように、私どもの環境は科学技術で構成されています。その環境のどこに自然があるか、多分ここから見えない太陽です。大気の状態は、この中に直接は迫りませんが大事なものとして考えなければなりませんし、空気が自然のものなのでからそういうことは考えなければなりません、自然と共に技術連関が環境になっているということを忘れてはなりません。この成果は、どんなものなんだろうということを考えてみなければなりません。まず文化面の基本的人権の成果は、先ほどすでに申し上げました男女の平等ということ、男女は参政権ばかりじゃなくて、就職の面でもそういうことはございますし、大体この女性の学習権と言いましょか、女性が高等の学校で学習する権利というのが無かったような時代がついこの間まであったのです。皆様女子大は日本にも古くからあったと、こうおっしゃるかもしれませんが、女子大学は正式には女子大学校と言って「大学令」には入っておりませんでした。ですから戦前の女子大を卒業しても「文学士」という学位は貰えませんでした。それが、新制大学の制度になって女子大も格上げされて大学になりました。そして大学院もまた持つようになりました。ですから、私が大学に入った時には男しか学生はいないのです。そういうような偏りが全部無くなってきたのが20世紀から21世紀にかけてだということ、これは文化面で大事なことで、多分労働者の生活条件の向上とそういう意味での労働者の貧困からの解放も、我々の時代の文化面の誇るべき人権の確立に含まれるものであります。それから、科学技術の成果というのはどういうことなのだろうと言うと、「省力」です。力を省くということです。もう誰もそんなに重いものを持ってですね、運ばなくてもトラックがある、いや色々なものがあります。人々が例えば足が悪くなって、苦勞して歩かなければいけない時に杖をつけて行かなければならなかったのを、

今は色々な機能を備えた車椅子があって、身障者自身が力を省いて動いて行けるようになりました。私ども全体が急ぐ時の交通機関には航空機のような物さえある。人間がどんなに飛ぼうと思っても飛べないけれども、それを寝ていて国境を越えて行くような機械を使って外国に行くのは、走り回ることではなくて、椅子に座ってさえいればいいということです。これは本当に大きな省力だと言わなければなりません。それと同時に省力ばかりではなくて、我々の余暇が拡大しているのです。我々は色々労働しなければならない。しかし、通勤にも色々便利な物がありますから、余暇が来てきてその余暇に色々な教養を積むことも出来るし、悪いことも出来ます。そして生活圏が拡大している。遠く宇宙空間に広がっていると同時に、ナノ・スペースとかフェント・スペースというように極微の空間に私どもの生活圏は入っている。これは医学の手術とか病気の治療その他に大変な影響を及ぼすものだと言ってよろしいでしょう。ですから、人権が大事にされて、人間の生活が楽になってきたことなら、大変素晴らしい時代だと言わなければなりません。

### 自己矛盾の時代

しかし、3番目、よく見てください。3の「自己矛盾の時代」という題がありますが、3の2行目を見てください。16世紀に160万人、17世紀に610万人、18世紀に700万人、19世紀に1940万人、20世紀の途中までで1億780万人、だから2007年まで入れようとしたらこれにもっと足さなければなりません、これは何の数でしょうか。戦死者の数です。よろしいですか、ここで真面目な問題を考えなければなりません。人権の基礎は人命です。人の命が人権の基礎です。人の命なくして人権がどこにありますか。その人権を大事にした時代、人間の生活を楽にするために作ったはずの科学技術で何をしていたのかと言うと、科学技術で一番進歩したのは武器です。医者のことを考えてください。医者施設は本当に進歩して、その技術も科学技術によって進歩して、難しい手術が出来ます。しかし、その医者が日本の山口市にいて、そして九州の福岡、そんなに遠いところではありません、九州の福岡の人をここにいて治すことが出来ますかというとならないのですよ。でも、もし山口市にミサイルの発射するところがあって、パリにあてよ、ということが出来るのです。パリの人を殺すことが出来ます。誰をと特定できるほど正確には出来ませんが、パリ市民を脅かす

ことが出来る。だから科学技術は進歩したと言っても、殺戮の道具として物凄い進歩をしているのです。そして人権は大事にされていると言ってこんなに多くの死者を出した世紀は無いんです。勿論そういうときに必ず出る言葉というのは、人口は爆発的に大きくなって20世紀から21世紀にかけては50億、60億、いやもっとそれ以上になっているのです。それだから、戦死者が多くなって仕方が無いだろうと言うのですけれども、とにかく19世紀までの死者——よろしいですか、19世紀の末までというのは20世紀の前の時代です。今から100年以上前の19世紀の末までの死者、有史以来、人間の歴史が始まって以来、19世紀の終わりまで、これは3000年、4000年ぐらい数えていいのですが、有史以来の記録がある程度残っているということになりますから、レジェンドとして記録が残っているということにしますから、4000年とか3000年ぐらいの歴史上に戦死した人の数——と20世紀だけに戦死した数とどちらが多いかと言うと、どんな歴史家も口を一つにして言うことは、正式な統計は取れませんが、しかし歴史的に推定すれば20世紀100年だけ、21世紀の7年も入れて107年だけの方が、3000年4000年の人間の歴史よりも戦死者は多いのだということです。そして戦死とは、人間同士の殺し合いの結果です。そうすると、私どもは輝かしい時代にいると思いかけていたのですけれども、本当にそう言っているのでしょうか。「自己矛盾の時代」にいるのではないですか。どうして？「人権は大事だ」と言いつつも、人殺しをするような人がいたら、死刑にしてもそれはいいだろう。それもいけないのではないかと言う人さえいますね。他人を残酷な思いで殺してしまう人さえ、殺してはいけないのではないか。死刑は殺すことなのだからと言って死刑全廃を説く人もいます。そういう世の中であると言いながら、現実に私どもの世界で行われていった科学技術の進歩というものが、どういう結果を現しているかと言うと、殺戮の機械として最も効果的に働かされているということです。これは技術者だけの責任ではないのです。全人類の責任でしょう。ただ、言葉として言ってみると3の3の1行目から7行目を見てください。5行目、「もしかすると人類有史以来のその数より20世紀100年と21世紀7年の方が大きい(死者の数)。人権の基盤は何であり、科学技術は人間の何を目的にしたのか。」で、「この□の時代」というのは、私は悲しくてしょうがないし、皆さんも悲しいと思うけれども、ここには何ていう言葉を入れな

ればならないかと言うと、「この『殺戮』の時代」と言わなければならないでしょう。我々の時代は「殺戮の時代」なのです。どうしてかと言うと、犯罪による、それから自殺に当たるような数をここに入れていくと大変な数になってきます。そのほか、今まであまり大きな罪と思われないできているのですけれども、交通事故による死者というのの中でどうしても不注意による、色々な形の不注意による交通事故による死者というのはやはり「殺戮」と呼ばなければならないものもございまして、そういう統計などを論じている時間はないので、皆さんでお調べになってみてください。これはどういうことかと言うと現代はまさしく「自己矛盾の時代」だということです。一方で人権が大事だ、だから人命は大事だと言いながら、一方で省力によって人間のエネルギーを大事にして人生を意味あらしめなければいけないとっておいて、結局は、殺戮の時代を現実化しているのだとすればそれは、「自己矛盾の時代」です。自己矛盾とは何かと言うと、これは「非論理の時代」です。論理的でない時代。「論理的でないとはどういうことかと言うと、反哲学だ」ということです。時代の姿は哲学ではない。そしてその通り、今特に日本では、大学の改革とか改善と言うのですが、何が一番減らされてるのかと言うと哲学です。それが無いから非論理になっているのに、そういうものを潰そうとしている。だからこれを覆さなくてはならない、と思うのです。でも時代のこういう風潮をどうやって覆すのか。国家は強い、国家権力は強い。どうしたらいいのだろう。私はその力を持っているのは芸術しかないと思うのです。本当だろうかとか皆様思うかもしれませんが、私が考えていることを後の時間で申し上げます。どうぞ、一生懸命お聞きになってください。私の言うことの中に間違いもあると思います。何故かと言うと、どんなに人間が熱心に真面目に考えても、人間はもともと限定のあるもの、限りのあるもの、不完全なものです。ですから、私の正しいと思っている論理の中にも間違いがあるかもしれない。それから、私が言おうとしていることの中にも間違いがあるかもしれない。それは仕方が無いのです。ただ、お聞きいただいてどこかに一つか二つでも「それはそうかもしれない」と思うことがあったらそれを大事に汲み取って、ご自分の中で育てていってください。

## われら何をなすべきか

では、その後半の方に入りましょう。今までのところは「現代における」というその「現代」を説明したのですが、今度は「芸術の本質的意義」ということについての話になります。芸術と言えば、勿論そんな難しい、争い事のようなことではなくて、時代を覆すようなことではなくて、自分が与えられたわずかな余暇に趣味として楽しむことだ、と言う人も多いでしょう。それはそれでよろしいのです。趣味で楽しむので結構、色々な面倒なことを忘れて、自己矛盾の時代かもしれないけれど、そんなことを考えても自分はどうにもならない、自分の力ではどうにもならないのだから、自分は笛を吹いてしばらくでも楽しく過ごそう、それで結構なのです。それで結構なだけけれど、それは本質的意義ではないのです。それなら、自分は芸術ではなくて魚釣りをしよう、魚釣りをして楽しいです。そして笛を吹くと、世の中の邪魔になる場合もあるのです。上手な人が吹けば別ですけど、「またあの笛が聞こえてきた」と言って、「人畜無害の街だと思ったけれども山口もあんな笛が聞こえる」などと文句を言うてくる人が出てくるかもしれない。でも、それでも謙虚に吹いていれば、そしてその人がそれで生きられるならそれでよい。芸術に趣味の面があるとか、個人の楽しみとか慰みがあるということ否定するのではないのです。それはそれでみんなが認めていることです。ただ、その他に、現代において芸術にどんな重大な使命があるか、あるいは、その本質的意義があるかということを考えてみたいのです。

それで、少し回り道になるようにお考えになる方があるかもしれませんが、今私どもが所属している最も大きな社会的団体は何であろうかということを考えてください。もちろん、考える時間をお与えする余裕がありませんので自分で答えますけども、それは「国家」です。現在では国家がそれぞれの人間が属している社会的団体としては、最も大きなもの、そして強力なものだと言ってよろしいです。私どもがどんなに、最初に申し上げましたように、私どもは人類だと言っても、人類全体は組織を持っていません。だから、哲学的に考えると、我々はみんな人類で一つのものなのですが、それから生物学的に考えても、我々人類という種と言うか類に属しているものなのですが、しかし社会的存在として、最も強力な団体は何かと言うと、「国家」です。もちろん、宗教だと言う人もいるのですけれど

も、宗教は心において、精神において、そういうものになると思いますけれど、それは現実の社会生活には、そんなに大きな問題になりません。ですから宗教は大事ですけども、現実の生活に最も大きな影響を及ぼす団体は「国家」です。そして、私どもが属している国家がどのような国家かと言うと、「近代国家」です。近代国家というのは、ある程度、その法律、法制などを見ますと、決して民族国家ではありません。国籍を得た人がその国民になるのです。ですから、例えば、日本でも国際結婚をなさっている方がいるでしょうが、国際結婚なさっている方で、日本にいて日本の国籍を取ることはできます。奥さんが国籍を取ったり、旦那さんが日本の国籍を取ったりすることができます。日本ではなかなか難しいと言われてはいますが、できないことはない。一番民族国家でない姿をとっているのは、今は多少変わってきてはいますが、アメリカ合衆国です。アメリカ合衆国は、独立した時に、「あそこは自由な国だ」と色々な国から人が来しました。そして、色々な国の人がいるのですが、だから、ネイション (nation) ということなのです。英語でネイションですが、ラテン語でナティオ (natio) という言葉には、「民族」という意味と、「国民」という意味と二つあるのですが、民族——「生まれ」ということから来ると、ナティオのもともとの意味は民族なのですが——、民族国家ではない形をとるのが、近代国家なのです。ですから、ここにいらっしゃる方の非常に多くは、生まれで日本人の方というのが多いかと思いますが、しかし、生まれが日本人でなくても、日本の国民というのはあり得るのです。だから、国籍はある意味で変えることもできるのです。どうしても日本が嫌だと言って、イタリア料理よりも美味しいものはないと言って、イタリアに行こうと言ってイタリアに行って、食べているうちに益々イタリア人になりたいと思って、なろうと思えばなれるのです。何年か住みついて、色々な努力をしなければいけませんけれど不可能ではありません。そうすると nation とは国家と言っても、生まるとしても、法律制度の局地的全体系と言っても構いません。それもしか、モダンな時代だからできるようになったのですが。

ところが、近代国家が成長していくと、どうしても国境を守らなければならないとか、基本的人権というのは法律で守らなければならないといふと、その国の法律で守られる人がその国において基本的人権が守られるのです。ですから、近代国家が成長するにつ

れて、本当は民族国家でなかったのが、民族国家化しています。例えば、どういうことかと言うと、近代国家が成立する前には、近代国家の経済基礎として植民政策があって、植民地がありました。そこで、植民地で、その近代国家の中で圧迫されていた民族たちが独立して、今アフリカの国々がみな独立していますから、ですから今、国連に加盟している国の数はもう大変な数です。そして、今日本の普通の人で国旗を見てすぐ、これは何処の国の国旗だと言える人はいないと思うのです。それぐらい国家というのが、民族国家化していることは、結局どういうことかと言うと、「近代国家」というのは、非常に法律的に整備されていて、そこでの一介の市民の活動というのは限られてしまうのです。そして、戦争ということになると、戦争の主体は今までは国家です。これからの戦争の形はちょうど、例の 9.11 事件の世界貿易センターのようなことで、武器がどんどん整備されてきて、簡単に人間が使えるようになってくれば、少数のグループが国家に対して反対するというようなことも在り得るかもしれませんが、そうしますと、私どもが戦争に反対しなければならないというようなこと、あるいは、人類が今の状態を考えたら、何とかして人殺しの公の仕事のようにしている戦争をやめなければならないとどれほど理をつくして言っても、近代国家とは、戦争を前提とするナショナリズムを自分の一つの精神的な拠り所にしてるところがある。だから、この殺戮の時代に、その殺戮の行為に反対しようとする主張者には、難しいことがいっぱい出てくるだろうと思います。もうそういう人は、この国家の権益を享受することはできないというようにするかもしれない。私が今非常に恐れているのは、私が青年の時に感じたような日本の右翼化ということです。今少し感じているので、これから難しい時代が来ると思うのですが。ただ、近代国家がどういうことをしてきたかと言うと、それまでにない仕事をした。それまでにない仕事というのは何かと言うと、世界を戦場化していった仕事です。近代国家が整備される前は、「戦場」という概念があったのです。ウォーターローの戦いとか、日本海の手海戦、あるいは、関が原の戦いも……。そして、一般市民は、なるべくそういうものに巻き込まれないですむようになっていたのですが、近代国家が整備されてくると、戦場概念が無くなりました。戦争が始まると、あるいは始まる前から、世界の敵国のすべての都市は戦場になるのです。日本もそれに味方してと言うか、日本もそれに先駆け

て、例えば重慶の都市を爆撃するとか、色々なことをしました。アメリカも、広島を爆撃する、東京を爆撃するというのをやりました。だから、現代の戦争は大都市の市民にとっては大変なことでもあります。

## 世界戦場化に対する世界美化の運動

それゆえ「世界戦場化」、それは実践軍備化と言ってもいいと思いますが、それに対して、私どもが少なくともできることは、世界美化の運動だと思うのです。馬鹿な話だと思わないで聞いてください。「5、世界戦場化（実践軍備化）に対する世界美化（実践美学）の運動。美の実践者となること。その基礎として身の詩学の理念」と書いてございます。詩学というのは、詩を作る学問なのです。もともとは、アリストテレス（Aristotle）の詩学は詩を作る学問、ホラティウス（Horatius）の詩学も詩を作る学問で、それを勉強して、身を作る学問というものを、考えていかなければならない。身というのは、身を立てるというのは、今まで経済的に、あるいは、権力的に、自分が社会に出世することを「立身」と言っていました。でもそれは昔の考えで、「これからの立身」「身を立てる」ということは「自分自身を独立した人間として育て上げること」です。そしてそういう時に、どんな言葉よりも励みになるのは、詩人の言葉とか画家の仕事とかにあるのです。例えば、詩人の言葉にどういうのがあるか。「僕の前に道はない、僕の後ろに道ができる。」それは、一人の人が立ち上がって一步を進めるという時に、その人の前にその人の人生が作られていくのだということ。だから、人生の創造ということを私どもに励ますのは、芸術だということ意識することはできると思います。そして、現代において他の人は、世界の戦場化に努力しているかもしれないけれど、そして私どもの仕事としても、例えばある工場に勤めていると、その工場は結局のところはある薬剤を作っていて、その薬剤は戦争の時の毒ガスに使われるものかもしれない。けれども、私どもが意識してすることは、そういう世界戦場化への積極的な協力ではなくて、世界美化の運動をするということ。美の実践者となること。それは、本来一番つまらないことから言えば、街中の塵を拾うことだって構わないし、街の中に一匹でも多くの虫が出てくるようにすることでも構わない。とにかく、私どもの環境をできるだけ美しくすることです。

## 美はどこに行ったのか

現代における芸術の本質的意義の伏在する場を探さなくてはなりません。美はどこに行ったのかということです。今の都会の生活を見ると、美は無いと言ってもいいほどです。歴史がこわされ、美はほとんど無くなってきている。偶然的に美が出来てくるんですが、ほとんどが効果だけを考えて作られている場合が多い。だから、6の4行目、「快適と安易と経済と権力という目標とそのため恣意——自由ではなくて欲しいままにするわけです——と委託——何でも頼んでしまう、責任を避けること——、それから、計略と策謀、それを支える好奇心と野心。そのほかに現代に何かあるのか。」そこで芸術のことを考えてみましょう。ピカソ（Picasso）の絵には何が描かれているのだろうかという時に、ピカソのあの二つに割れた顔——こちらの方を向いている鼻、あちらの方を向いている鼻——、あれは何を意味するのか。『25時』という小説を書いたConstantin Gheorghiu（コンスタンタン・ゲオルギウ）という作家が祖国ルーマニアからダッハオ（ナチスドイツにより作られたユダヤ人収容所）にトラックで連れ去られるとき、自分の両目は祖国を見ているが、自分の行先は西の方であって、鼻は西に向けられているという顔のこわれた状態で、今にあてはめると一人の人間の顔が二つに割れているというのは一体何かと言うと、それは現代人の苦悩も確かに表しているのです。原子力の発電を認めなければならないほど、日本の電力は原子力に依存しなければならない。だから、原子力発電を作る方向に進まざるを得ない。しかし、自分は国人としては心の中で日本の美しい風土がそんなものに汚されるのは嫌だとか、危険な地震のある国が、原子核のようなものを扱う工場を作って大丈夫なのだろうかという不安。そこで、人間はどうしていいか分からないという実存の分裂を意識せざるをえない。ダリ（Dali）の絵を見てみる。すると、懐中時計がもう壊れたように融けて枝にぶら下がっているのです。それは何かと言うと、共通の仕事の時間がなくなって、人がおのれの時計の時間になっているということでしょう。一人一人の人が時間を持っているということです。ということは、時間の個性化ということです。もう共同に本当に人が喜んで進む方向が分からなくなっているということです。そして、ロトコ（Rothko）の絵はどうだろう。皆さんの中には、ロトコの絵を知らない人がいるかもしれないけれど、赤だ

け一色塗られている、あるいは、黒だけ一色塗られている。何にも描かれていないのですよ。絶壁のような絵です。どうしてそんな絵が出てくるのだろうか。何を告げているのだろうか。ロトコの絶壁のような絵の前に立っていると、折角個性化された自分の未来が全く閉じられている、としか言えない社会の閉塞状態の中で絶対の孤独が助けもない状態で意識されます。その絵を見つめていると、しかし、一条の光が透けて見えてくる。そこにひとつのメッセージがよみとれる。断絶を破るのではなく、自己の中から出す光りで断絶を透明化する実存の力を喚起するのです。それから、新しい芸術の中には、古い人たちから「それは芸術か？」と言われるようなものがある。何か知らないけれど、繁華街の一角に古いオートバイやこわれた自動車、古い椅子を並べておいて、ガラクタでも何でもそこに置いて、「これは芸術だ！」とこう言う人もいるのです。でもそれは何かメッセージがあるかと言うと、もし、私どもにこの機械だけの世界の中で、山から拾ってきた松でも、その辺の草花でも、何でも置いてみただけでも自然の花の美しさが分かってくるということがあるように、今のように、ある計画によって立てられた物の配置というものが決まっている世界の中で、そういう計画から離れて、雑然と置いてみただけでも、一つのショックを与えるということは一体どういう世の中なのかというと、それこそ、新しい考えで新しい美を見つけ出すような努力をしなければならぬ時代になっているということでしょう。つまり、日常的な機械の配置は労働と競争の世界への準備です。無秩序に事物が置かれるとき、その置き方に内的な夢を非日常的な次元に遊ばせることができるのです。人間が日常性に埋没するのを防ぐひとつの切断です。それはロトコを更に一步進めたものかもしれない。

皆さんは、今話したピカソやダリやロトコの造形芸術を通じて、あるいは、物を自由に展示するだけで、アイテムの集合のようなもので、それで人にある感動を与えることができるということは結局何かと言うと、今は、造形芸術は一つになって、祈念、戒告、このままでいいのかという戒告、との渦巻きのような時代だと言っていいのです。詩でもどういう詩があるだろうと言うと、例えば齊藤茂吉の詩の中に、「最上川逆白波（さかしらなみ）のたつまでにふぶくゆうべとなりけるかも」という歌があります。逆白波というのは、逆さに立っている白波。川がこう流れていると、波がこういう風に行くのですけれど、風が吹いて来て

波がひっくり返るように逆さになる。そういう言葉が無かったのを、斉藤茂吉が気づいて言った。そして、人々は簡単に、今まであった現象なのだけど人が気づけなかった、言い得なかったと言うのですけれど、本当にそうだろうかということを問わねばなりません。風は野原を吹いて行く。川の流れと逆に野原を吹いている風はあるでしょう。しかし、建物が自然の風の行方を防がなければ、風は広野を吹いて行って、川の上も吹いて行くから逆白波が立つほどではないと思うのです。しかし、風の道が絶たれていって、そして空間が空いているところに風が吹こうとすれば、風は川面すれすれに吹いて行くようになる。だからこれは、決して今まであった現象を人が見過ごして言わなかった言葉ではなくて、新しい現象、ちょうど20世紀の真ん中頃に出てきた自然の自己矛盾です。時代の自己矛盾が自然の自己矛盾にもなって出ていたことではなからうか。そうすると、私どもは今までの芸術を見ることによって、私どもの時代が本当に人間の自己矛盾であると同時に、自然の自己矛盾でもあるのだらう。人間は目をもって見れば、向こうが見えるはずなので、展望が見えるはずなのです。精神の目で見れば展望があるはずだ、その展望が絶たれるような絶望の世界を意識させるために、とうとうピカソからダリ、ロトコに至ってちょうど20世紀の真ん中頃、終わり頃、結局もう先が無いというような形の絵を見せてくる。こうして、芸術を学ぶことは人間の現実を、まだ人間が気づけなかった現実を教えてもらうことになる。なぜならば、芸術家は本人が意識するか否かは別として、ある描かざればいられないようなものを描く、言わざるを得ないような言葉を言う、そういうことは過去に向いた精神で理解しようとするれば理解できないかもしれないが、共に苦しむ精神で見ると、パトスを共にする精神で見ると、分かってくることはなからうか。

### 賛美とあこがれと涙とほほえみ

そして、8を見てください。現代とはテクノロジーが道具であるという性格を維持したまま環境となった時代である。その環境に埋没したら我々人間は、ちょうど自然に埋没した動物が自然の動物になっていったけれども、人間はそれに埋没しないで、技術を作ることによって自然だけの環境を越えて、ある優れた生活ができるようになったのですけれども、もし技術という環境に埋没したら技能動物に化すのであろう。技能

動物というのは、機械のような動物です。つまり、内的な自立性を失った動物になるでしょう。新しい環境を越えるのは、芸術の力として見ていかなければならない。なぜかと言うと、「讚美」と「あこがれ」と「涙」と「ほほえみ」という、こういうものがないと本当の美は出来てこないのです。今、人々はただ好奇心とか、自由のみを言っているのですが、本当に自立的精神のある人の好奇心ならば、善いことに対する好奇心が向くと思うのですけれど、好奇心だけに任せるならば、恣意的な好奇心ならば、どんな悪いことが起きてくるか分からない。犯罪が多発する世界というのは、人間が本来自立的な、そして少しでも現在を超越して向上しようとする、そういう精神を失った時に出てくる。だから、「美」という字をもう一度見直してみましよう。「美」という字の上半分は「羊」という意味で、羊は牧畜産業や狩猟産業をもっていた中国では、「天」に捧げる犠牲の獣です。「天」は英語の「Heaven」と同じで「God」を意味します。中国語で「神」という漢字は、人間の精神に関することで神様の意味はありません。「美」という字は「天」に捧げる犠牲が大きいということです。だから、自分が他人のためにとか、社会のために尽くそうとすること、そのためには自分の欲望をある程度抑えたり、自分が嫌なことをしたりしなければならぬことがある。そういう自発的な犠牲の精神が大きければ大きいほど、美というものが出てくるということです。そうすると、「美」というのはもう一つの漢字「善」と比べてみなければならぬ。「善」もある犠牲と関わるのですが、これは世間が用意した容器——「缶」の部分を表す——に合う様な犠牲。例えば、税金はこれぐらいだと決められている、その税金を払うのは自分の犠牲になりますけれども、しかし、世間が決められただけの犠牲をすればそれでいい、「善」です。そうすると、「美」は善を超えるのです。どうしてかと言うと、世間が決めていたそういう犠牲よりもはるかに大きな犠牲、何もすぐ自分の命を捧げたりする必要はありませんけれども。とにかく自分が他者のために良いことをしようとすること、社会のために良いことをしようとすること。具体的に言うならば、今上で私が言ったように、「世界の戦場化」に加担するのではなくて、世界を少しでも美しくしようとするための、例えば、街を掃除することも含めて、あるいは、自分達の仲間を街を飾ることにしても、あるいは、自分達の言語を美しくすることにしても、それは世界を美しくすること。

それに努力をするという時にはじめて、美が出てくるだろう。美は与えられるものではなくて、自分が作ることもできるものだという確信を持って、そして、その作るもの、美を作るものの一番大きなものは芸術であり、それからもう一つ、人間の行為です。行為の美しさもあります。そして、芸術は私どもに一番力強く世界を変えていく手がかりになるものだと思います。嘘だと思ふなら、皆さんは気がついていらっしゃらないかもしれないけれど、日本が自己を世界に開いた時——それは明治維新だと言われていますが、明治維新以後に日本が世界に自己を開いた時に、どういうことが行われたかという、アメリカ人達、あるいは西洋人達は、日本に来て、日本の仏像とか、それから日本の絵画に驚くのです。だから、ある意味で、鉄砲や大砲で脅したり、開国を迫ったりした、そういう武力で攻めて来たそういう国が、その国の一番大事な都や街の中に何を作ったかと言うと、勝利の記念碑ではなくて、ボストンの美術館の中に日本の美術をたくさん入れて、人々を教育するようになった。そして、日本はどうしたかと言うと、確かに日本は国を開いた時に、法律を学ばなければならない、軍備も外国の技術を学ばなければならないという風にして、学んでいこうとしたのですが、そういう仕事の結果は、それぞれの専門領域の世界にしか留まらなかったけれど、日本のそれからの文学の姿はすっかり変わりました。江戸時代の文学に比べて、つまり日常生活の中で人情の苦しみとか哀しみとか、それも大事なことなのですが、人生をどのようにして生きなければならないか、学問と文化と我々はどういう風に対決しなければならないかという問いが、漱石の小説、鷗外の小説によって問われ始めていくのです。だから、どんなに違う国であっても、芸術を通じてお互いが学び合うことができるのだということを、我々ははっきりと意識していると思います。そしてそのためには、我々は、「美」はただ感覚で快適なものだという風に思わないで、6の4行目をもう一度見てください。「快適と安易と経済と権力ということ以外に、今の日本の一般社会に目標があるのか」と、こう問うてみなければなりません。こういう目標のために役立つのは、恣意と委托と計略と策謀です。そしてそういうものを支えるものは、好奇心と野心です。その他に何があるのか。私どもが忘れてはならないのは「讚美すべきものに対する讚美」、8の3行目から6行目を見てください。「讚美すべきものに対するあこがれ」、「感動すべきものに正直に流

す涙」、「気の毒な人、かわいそうな人に注ぐ涙」、そして嘲笑ったり、高笑ったりするのではなくて、「静かなほほえみ」。「讚美とあこがれと涙とほほえみ」というのは、機械の世界の中では無いのです。昆虫の世界の中にも無いのです。もし我々がこれを忘れて、先ほど言った、恣意と委托と計略と策謀、これによって機械を動かすことはできるのです。でも、これではいい機械は出来てこない。本当に創造するためには、「讚美」と「あこがれ」と「涙」と「ほほえみ」というのを忘れてはならない。そして、これが備わった人柄ならばそれはたぶん、顔は醜くかろうと、姿は貧しかろうと、心は美に近づくことができると思います。なぜならば、この精神があるならば、私どもは他者に対して少しは犠牲を喜んで払うような人になっていくことができると思います。

## 結 び

9番目の言葉、「里仁為美」。これは、『論語』にある言葉ですが、「仁におれば美を為す」と読みます。「仁に住みついたら美を為す」、仁に住みついたら多少の犠牲を払ってでも人の為にすることができる、その時に美しい行為ができる。これは、魂の世話を忘れないで、自分を少しでも超越するあこがれ、「身の詩学」としての自己創造につながる心ではないかと思っています。

私が異文化交流研究施設からいただいた時間を5分ほど超過しておりますので、これで話を終えようと思いますが、ただ一つだけ最後に一言言わせてください。私どもが、みんな至らない人間でありますけれども、共通に与えられている素晴らしいことというのは、偉大な芸術作品の前に、心の喜びを感じることができるということと、その心の喜びを感じた後に、自分を省みた時に、ある種の悔いのようなもの、自分がどうして今までこのことに気が付かなかったのだろうかという悔いのようなものを感じることもできることです。「喜び」と「悔い」とが一つになった時に、人間は進歩することができるのだと思います。今までの自分を超えていくことができるのだと思います。そして、その超える時に、「過去への決別の涙」と、それから「将来への超越のおののき」のようなものが感じられてくると私は思います。そういう感じは、若いときに必ず訪れるものだと思います。それを大事にしてください。そして、それを大事にするためには、芸術作品を、本当に好きで見るというその見方で結構、好きで

聞くというその聞き方で結構なのですが、一月に一度とか二月に一度は、本当の作品に学ぶということ、教わるということ、人は人に教わるのですけれど、人は人が作った精神の結晶、「に教わることもできます。人が作った精神の結晶の中で、私どもに苦労なくその歓びに接しうるものは芸術ではないかと思えます。だから、私は「芸術の現代における本質的意義」とは、そういう意味で、この廃れてしまった世界を本当によくしていくものが芸術だと申しました。芸術が美しくするというのは、結局何かと言うと、「人間が倫理的に善くなること」につながるということです。芸術と倫理というのは結び付かないものだと思う人がいるかもしれませんが。でもそうではないです。必ず両者は結び付くのです。だから、ご自分自身の「身の詩学」ということを実現していくように努力してください。以上をもって、話を終わります。

#### 配布資料

- 1 われわれの現在の処在はどこか。人は己の立つtopos (場) を知らねばならぬ。われわれの立つtoposこそが現代である。それを20世紀と21世紀の7年を加えた107年としよう。
- 2 それはいかなる時代であるか。時代を見るときはその文化および文明の特色を見るに如くない。  
文化面では基本的人権の確立に伴う権利の承認、その成果\*  
文明面では科学技術 (technology) の躍進による技術連関 (technological cohesion, technological conjuncture) が成立、その成果\*\*  
\* 労働者解放、男女差別の廃止、参政権、学習権、身障者福祉法、人種差別廃止  
\*\*省力、余暇拡大、生圏拡大 (遠く宇宙空間へ、また極微の nano-space, femtos)

- 3 自己矛盾の時代  
16世紀160万人、17世紀610万人、18世紀700万人、19世紀1940万人、20世紀1億7800万人 (World military and social expenditures 1986年までの80数年間)、これは何の統計か。もしかすると人類有史以来のその数より20世紀100年と21世紀7年の方が大きい。人権の基盤は何であり、科学技術は人間の何を目的にしたのか。  
この□の時代とは自己矛盾の時代であり、それは非論理の時代であり、それこそ反哲学の時代である。これをくつがえさなくてはならない。eco-ethica (生圏倫理学)
- 4 われら何をなすべきか  
戦争を前提とするようなnationalismの近代国家の桎梏の中で一介の市民として何ができるのか。
- 5 世界戦場化 (実践軍備化) に対する世界美化 (実践美学) の運動。美の実践者となること その基礎として身の詩学の理念
- 6 現代における芸術の本質的意義の伏在する場を探索しなくてはならない。  
美はどこに行ったか。  
快適と安易と経済と権力という目標とそのための恣意と委託と計略と策謀、それを支える好奇心と野心。そのほかに現代に何があるのか。
- 7 Picaso, Dali, Rothko, の作品は何を告げているのか。事物配置の試みは何を求めているのか。造形芸術の意味 祈念と戒告の渦巻き
- 8 現代とはtechnologyが道具であるという性格を維持したまま環境となった時代である。その環境に埋没したら技能動物に化するであろう、人間も。人間の特色は言語という超越志向の性格をもつ存在。詩の意義  
新しい環境を超えるものは芸術の力としての、賛美とあこがれと涙とほほえみ  
美の理念 美という文字が示すもの
- 9 結び 里仁為美 それはepimeleia tes psyches (魂の世話) を忘れないで自己を超越するあこがれ身の詩学としての自己創造につながる。